ディケンズ時代の女性 (1)

増　田　秀　男

I　Expansion

Little Dorritt でエイミーとファニーの polisher となる Mrs. General は，次のように描写されている。

> In person, Mrs. General, including her skirts which had much to do with it, was of a dignified and imposing appearance ; ample, rustling, gravely voluminous ; always upright behind the proprieties. She might have been taken——had been taken——to the top of the Alps and the bottom of Herculaneum, without disarranging a fold in her dress, or displacing a pin. (*Little Dorritt,* Book Ⅱ, Ch. 2.)

「大きく，さらさらと鳴り，重々しくゆったりとした」スカートがここには描かれている。ここでディケンズが描いているのは<大スカート時代>の女性の姿である。『リトル・ドリット』が分冊出版の形で発表されたのは，1855年から57年にかけてであったから，少なくともこの作品の執筆の時期は大スカート時代の中でも特に大きなスカートが流行した時期と重なっている。だが，例によってディケンズの<省略法>のために，あるいは，ことにこの場合について言うなら，female beauty below neck-level に関する描写不在（Slater, p. 359.）のために，大スカートの実態はわれわれには見えてこない。次に引くのは，二人の服飾史家の大スカートに関する記述である。

> From about 1830 onwards skirts had been growing gteadily fuller,

and by 1860 they had reached a truly enormous size......we are told that in 1856 a lady had daily to put on

> "long lace-trimmed drawers, and under petticoats three and a half yards wide, a petticoat wadded at the knees and stiffened in the upper part with whalebone, a white starched petticoat, with three starched flounces, a muslin petticoat, and finally the dress."
> (Quennell, vol. IV, p. 93.)

'Many belles now wear fourteen (petticoats) in evening dress. They go to a ball standing up in their carriages, and stand between the dances, for fear of crushing their dress and fourteen petticoats.'
(*The Ladies Companion,* April 1856, quoted by Gernsheim, p. 44.)

二人の記述から分かることは，1830年頃からスカートが徐々に＜拡大＞してきたこと，大スカートを支えていたものは，多数の単純なペティコートと，いろいろな方法で加工したペティコートだったということである。つまり，大スカート時代はまず多ペティコート時代だったのである。そして『リトル・ドリット』でディケンズが描写しているミセス・ジェネラルのスカートは，大スカート多ペティコート時代のものと想像して良いであろう。と言うのは，二人の服飾史家は，いずれも1856年の文献によって多ペティコート時代の実態を記述しているのであるが，実はこの年は，クリノリンがイギリスに入ってきた年であって[1]，1856年を境に――つまりディケンズが『リトル・ドリット』を執筆している最中に――イギリスはクリノリン全盛時代，すなわち，特大スカート少ペティコート時代に入ってゆくからである。

クリノリン――a separate cage of steel springs in hoops of increasing diameter to the bottom, connected with tapes or curved steel ribs (Gernsheim, p. 45.) ――の時代が少ペティコート時代であるのは，少なくともスカートを大きく膨らますためのいろいろなペティコートは不要になったからである。これによって女性は，まず多ペティコートの重さ，暑さから解放された。スカートを＜拡大＞するためにペティコートを14枚も付ける必要は無くなったのである。また，スカートが前よりも大きくなったことから――ク

リノリンの最大のものの bottom hoop の円周は6ヤード近くあった(Gernsheim, p. 48.) ――女性は tight-lacing からも解放された。ウェストは相対的に細く見えるようになったからである。

だが，mobility と utility を無視した (Cunnington, p. 183.) このスカートには，当然のことながら多くの欠点があった。このスカートは，馬車の車輪に巻き込まれたり，風にあおられて倒される，あるいは，不運な場合には，崖から吹き落とされるといったように，いろいろな事故の原因となった。なかでも多かったのは，暖炉の火に引火，火傷，あるいは焼死という事故だったようである。ガーンズハイムが引用している文章にあるような，馬車に乗って坐ることができないとか，ダンスの合間に形がくずれないように立っていなければならなかったなどというのは欠点のなかでも小さなものだったのである。

ところが，この不自由極まるスカートは，あらゆる階級の女性によって，あらゆる場所，あらゆる機会に用いられたのである。

> At the height of its popularity the crinoline permeated all classes and was regarded as indispensable for everything except riding. It was worn not only by fashionable women but by their maids, by peasant girls in the fields, by factory workers, by mountaineers, on the beach. (Gernsheim, p. 54.)

家庭や外出時ならともかく，畑でも工場でもこのようなスカートが着用されたということは信じがたいことかも知れない。ここは別の証言が必要であろう。次に引くのは Samuel Courtauld & Co. が1860年に工場内に出した掲示の一部である。

> The present ugly fashion of HOOPS and CRINOLINE, as it is called, is......quite unfitted for the work of our Factories. Among the power Looms it is almost impossible, and highly dangerous......we now request all our Hands, at all our Factories, to leave HOOPS and CRINOLINE at home when they come to the Factories to work. (de Marley, p. 124.)

コートールドはクレープで財をなした実業家である（Wood, p. 109.）が，その工場の織機の間を，大スカートの女性たちが歩き回っていたのである。ちなみに，この資本の論理と流行の論理の対決は，資本の論理の勝利に終わった。そしてこの種の対決は全国いたるところで——例えば陶器工場でも家庭でも——あったであろう。

織物工場や陶器工場で労働している女性でさえ大スカートを着用していたのだから，『リトル・ドリット』のミセス・ジェネラルも「アルプスの頂上にも，ヘルクラネウムの底にも」——小説の執筆の時と小説の背景となっている時との<時差>のために，そうなるのだが——当然大スカート多ペティコート姿で行ったのである。女性の active outdoor exercise のために，ファッション史上初めてデザインされた walking dress が現れるのは，1862年であり，身体の動きと衣服の動きとの time-lag が小さく，伸縮性のある，さまざまなスポーツ・コスチュームが生まれるのは，さらにその後の事になるからである（Cunnington, pp. 187–189.）。

だが，大スカートあるいは特大スカートは，19世紀のイギリスでずっと続いていたファッションではない。ではそれ以前はどうだったのか。実は19世紀のイギリスは，実に簡単なファッションから出発したのである。

> ......in 1800 an old lady described seeing her grand-daughters partly clothed, as she supposed, in but one petticoat and powdering gown apiece, and was astonished to learn that in reality they were fully dressed for the opera. (Cunnington, p. 195.)

> The soft muslin dresses of the 1800s, clinging to the body, made superfluous any undergarments that might spoil the natural outline......
> (Nunn, p. 113.)

上の二つの引用文で述べられているような，少なくともスタイルの点では簡素といってよいファッションは，1790年代からはじまったと言われている。そしてこのファッションはジェイン・オースティンの小説の『マンスフィールド・パーク』のファニーを除くヒロイン達の，ディケンズの描く女性と比べてはるかに自由で活発でのびやかな生き方を象徴している。

しかしこのファッションは長くは続かない。前に引用したクェネルの文章にあったように，1830年頃から大スカート時代が始まるのである。ではこのファッションの変化に意味はあるのであろうか。

The birth of class——the breakdown of the old vertical relationships of patronage and dependency and their replacement by vertical class antagonisms——was from the point of view of the old society a process of alienation : alienation, that is, of the middle and lower ranks or orders from each other and from the higher. (Perkin, H., p. 182.)

パーキンは，イギリスでは，産業革命の結果，「庇護と従属」の絆によって成立していた古い階級社会が，フランス革命と第1次選挙法改正（1832）の間のある時期に（Ibid., p. 177.）「縦の階級対立」を基軸とする新しい階級社会に変わったと言う。またその変化の特徴は，上，中，下層階級の「疎隔」であったと言う。そして，いわば和合ではなく，疎隔，対立を前提とする新しい階級社会では，階級を表す言葉も変わった。従来の orders and ranks は classes に変わったのである。そして classes という言葉が一般に使われるようになったのは，遅くとも1830年代であるという（Harrison, p. 234.）。この頃からイギリスは，階級が互いに疎隔しあうという意味で，非常に階級意識の強い国になったのである。

The Victorians and Edwardians made no attempt at reticence about social and economic differences. Railway trains were divided into three classes of accomodation ; church and chapel seating was often segregated into rented pews and free pews 'for the poor' ; and public houses were divided into public and saloon bars. (Read, p. 23.)

ここに述べられている階級による差別は，イギリスを知る者にとっては馴染み深いものであるが，鉄道，教会から酒場にいたるまでの階級による空間区分の存在は，いわば疎隔が日常化していたことを窺わせる。なかでも鉄道は丁度階級意識のせめぎあいが顕在化した1830年代に発達しただけに，社会階級に合わせた形で，一等，二等，三等の区分を持つことになった。そして日

本も含めて多くの国がそれにならった。しかし，イギリスにおける区分は，車両の等級の区分に止まらなかった。1839年に建てられたユーストン駅では入口から切符売り場，待合室にいたるまで等級別であったし，1922年に再建されたウォータールー駅では一等と三等の女性便所が別であった（Richards, pp. 137–139.）。しかも，ウォータールー駅の場合は，各等級の利用パーセンテージが一等41%，二等42%，三等17%（1845年）から，一等９%，二等14%，三等77%（1875年）に変わり（Read, p. 67.），さらに三等の利用者が95%（1905年）になった（Waller, p. 159.）後の時代にまで存続した区分なのである。1830年代までに確立していた階級の疎隔は，実に百年近くもその効力を失わなかったのである。

では，その疎隔の動きの中心となったのはどの階級であったか。それは1832年の第１次選挙法改正によってその大部分が選挙権を得た中流階級であった。そしてこれら中流の人達の文化の基本となったのは，separate spheres すなわち，一戸建ての家にはじまり，職住の分離，女性の仕事からの分離を頂点とする考え方であった（Thompson, p. 197.）。パーキンのいう新しい階級社会の「縦の対立関係」のなかで，中流階級のアイデンティティを支えるものとして，先ず雑居的な住環境からの離別，男女の活動領域の分離があったわけである。ではこの中産階級の分離の原則が支配的になったのはいつ頃だったのか。

By the 1830s and 1840s such separation (separation of home and work-place) was becoming more common amongst both the upper-middle and sections of the lower middle-classes as suburban housing was more extensively developed. (Hall, p. 186.)

ホールが上の文章で述べている，郊外への脱出による職住の分離——これはパーキンの考え方から見れば当然，下層階級との疎隔ということになるわけだが——は，1830年代にはじまっている。そして職住の分離は，同時に，男女の活動領域の分離，すなわち女性の労働からの分離であったから，すでに18世紀から徐々に始まっていた，中流階級女性の idle drones 化（Stone, p. 247.），または，その洗練された，あるいはイデオロギー的に強化，拡充された形態である，perfect lady 化も，1830年代から加速的に進行することに

なるわけである。さらに，前に見たように，新しい階級社会の階級を表す言葉である class(es) は1830年代に定着し，スカートの＜拡大＞も1830年から始まっている。では職住の分離と男女の活動領域の分離，また階級意識の尖鋭化，さらにスカートの＜拡大＞にはどのようなつながりがあったのか。これらをつなぐものは何だったのか。

職住の分離を促した中流階級の郊外への脱出の原因については先ず以下のような理由が考えられる。

> The middle class, who had always dwelt in the centres of the towns at or near their places of business, had taken, by the thirties if not earlier, to abandoning the old setting. The incentives to do so were usually some combination of three factors. There was a desire for landed space, and the ways of the landed. Profits could be realized by urban sales......Finally there was serious deterioration of amenity, for old town centres were often made unsavoury by the masses who had been brought to being by the new business initiative. (Checkland, p. 265.)

ここに挙げられている都心脱出の理由は，土地を持ち，地主のように生活したいという願望，都心の土地にかなりの売却益が見込めたこと，ならびに都心の生活環境の劣化である。しかし，階級意識が尖鋭化した時代背景を考え合わせると，この時代の中流階級にとって，都心脱出の一番大きな誘因となったのは，土地を所有し，地主のように生活したいという願望，つまり genteel な生活への憧れだったと思われる。この時期の中流階級にとって形の上で地主階級の生活様式に近づくこと，また労働者階級と一線を画すことは，最大の急務だったはずだからである。そのために，彼らは都心を脱出して，まず労働者階級との雑居的な状況を解消し，労働者階級との物理的な疎隔をはかった。そして郊外に detached house あるいは少なくとも semi-detached house を構えることによって genteel な生活にさらに近づいた。同時にせいぜい共同住宅にしか住めない労働者との距離をさらに拡げた。しかしこれだけでは充分ではなかった。これらとともに，労働に関しても，肉体労働はしないという労働者階級との差よりも，もっとはっきりした，もっと決定的な

gentility の標識が彼らには必要だった。そしてそれが男女の領域の分離，すなわち女性の労働からの分離であった。少なくとも女性は労働しないということは，殊に労働者階級との関係で重要な gentility の標識だった。この時代は貴族，ジェントリーは男女ともに労働せず，労働者階級は男女を問わず子供まで労働するというように，労働と不労が階級を分ける基準になっていた時代だったからである。中流階級は，男性は労働するが女性は労働しないというかたちで gentility を確保するしかなかったのである。女性の不労によって，貴族，ジェントリーよりは genteel でないけれども，労働者階級よりは genteel であるということを示す必要があったのである。だがまた激化する階級意識のせめぎあいのなかで，女性の gentility すなわち不労は，強調され誇示された。そして不労の強調，誇示のために，中流階級の女性は労働には適しない，それどころか，それを着るのにも，手入れをするのにも人手を借りなければならないような服装を，上流階級のファッションから取り入れたのである。大スカートは，何よりもまず中流階級の女性が genteel なレディーであること，idle drones でいられる身分の人間であることを，世の人に知らしめるために＜採用＞されたのである。そしてこの gentility の標識は，おそらく中流の上，中，下と徐々に浸透していって，ついに労働者階級にまで達するのである。大スカートの流行は femininity を強調するために生じたものではなかった。新しい階級社会のなかで上から下へと徐々に拡大してゆく gentility すなわち不労と遊惰を，目に見える形で表すものだったのである。

大スカートは，前にあげたコートールドの織物工場のクリノリン禁止令に見られるように，1860年には，労働者階級の女性にまで広がっている。中流階級の女性がジェントリーや貴族の大スカートを模倣したように，労働者階級の女性も，中流階級の女性のファッションを模倣したのである。この点からすると，1860年には，大スカートはもはや gentility の指標ではなく，単に性の指標になっているようである。しかし，これほど mobility と utility を無視したファッションが労働者階級に受け入れられるのには，かなりの時間がかかったであろう。したがって，少なくとも1850年代の初めまでは，大スカートは genteel なレディの標識として通用したはずである。たとえば drawers の例を見ても，ヴィクトリア女王即位の頃には ladies の間で着用されるようになったのが，労働者階級の女性がこれを用いるようになったのは

1860年代だという（Read, p. 39.）から，大スカートの場合も，普及の点でかなりの＜時差＞を見込んでよいはずだからである。それに，スタイルは同じでも中流女性の大スカートと労働者階級の女性のそれとでは，一目ですぐ分かる違いがあったであろう。前者のそれは生地，色，柄，仕立て，trimness の点で大きな違いがあったはずだからである。なにしろ，労働者が，中流階級の豊かな層と比べてはるかに少ないその収入の中から衣料費に遣えるのは，1845年では６％，1889年で８～９％，1904年でも12%に過ぎなかった（Briggs, p. 282.）のだから。ただ，コートールドの場合に限らず，労働者階級女性の大スカートの＜弾圧＞の裏には，質的な違いはあるにせよ中流階級の gentility の大事な標識を横取りされたことに対する，怒りとまではいかなくとも苛立ちはあったであろう。

大スカートの流行は，徐々に進行する gentility の拡大，中産階級女性のレディー化を表すものであった。そしてそれは同時に，中産階級そのものが経済的には勿論，政治，文化の面でも大きな発言力を持つにいたったことを表すものであった。ちなみに，ディケンズの作家としての活動の時期は，大スカート時代とほぼ完全に重なっている。ディケンズがロンドンの生活を描いた小品を書きはじめたのが1833年であり，1865年に *Our Mutual Eriend* を書きおえてからは，1870年に *The Mystery of Edwin Drood* に着手し，同年中に亡くなるまでは，ディケンズは，少なくとも小説家としての活動は，しなかったからである。そして，straighter, narrower skirts があらわれたのは1866年だった（Gernsheim, p. 53.）からである。

II Contraction

Mrs Jellyby had very good hair, but was too much occupied with her African duties to brush it. The shawl in which she had been loosely muffled, dropped onto her chair when she advanced to us ; and as she turned to resume her seat, we could not help noticing that her dress didn't nearly meet up the back, and that the open space was railed across with a lattice-work of stay-lace——like a summerhouse. (*Bleak House,* Ch. 4.)

ディケンズはここでは――背中ではあるが――女性の neck-line から下の描写を敢えてしている。語り手が女性のエスターだからでもあろうし，「女性の美」を描いているわけでもないからであろう。『荒涼館』が発表されたのは，1852年から53年にかけてであったから，いずれにせよジェリビー夫人が身につけているのは，クリノリン出現以前の大スカートと，少しきつめに締めたコルセットのはずである。クリノリン以前は，前にも述べたように，tight-lacing の時代だったからである。そしてコルセットの流行は大スカートのそれよりほぼ10年早く1820年頃に始まったと言われている。

> After about 1820 corsets or stays became an essential part of 19 th-century costume......in spite of considerable outcry against them. (Nunn, p. 113.)

つまり，大スカート時代の前にコルセット時代，tight-lacing の時代が，さらに言うなら，コルセット小スカート時代があったわけである。そしてコルセットの表していたものは，大スカートと同じく gentility であったろう。また，コルセットの場合は，体型の＜補正＞によって生じる淑女らしさと不労の誇示との両方に狙いがあったであろう。コルセットが不労を誇示するものでもありえたのは，ヴィクトリア朝時代のコルセットが，それを付けるとほとんど坐ることも屈むこともできず，6インチ以上は足を動かすこともできない（Crowley, p. 104.）ようなものだったからである。また上の引用文で「相当な抗議があったにもかかわらず」というのは，大スカートの場合と同じくコルセットの場合も，実害があったからである。日常の立ち居が不自由なばかりでなく，内蔵の位置がずれてしまったり，肋骨がずれて肺に食い込んでしまったりして，重い病気や死の原因となり（Gernsheim, p. 70.），若い女性の死亡率を押しあげる(Read, p. 7.)程だったからである。もっとも，tight-lacing の弊害が頂点に達するのは，女性が crude intimations of sexuality のために曲線を強調あるいは創造しはじめた1860年代中頃（Read, p. 39.），つまりガーンズハイムが straighter, narrower skirts が現れたと言っている頃からであり，ジェリビー夫人のコルセットは，それほどタイトに締められていなかったであろう。というのは，ブリッグズも言っているように，ヴィクトリア朝時代は全体としてコルセットが流行した時代（Briggs, p.

281.）なのであるが，1820年代は勿論，ヴィクトリア朝の初期におけるコルセットは，何よりもまず gentility を表すものであって，リードの言う「曲線の強調」による「露骨な性のほのめかし」がコルセットを使って行われるようになるのは，60年代以降だからであり，後で見るように，むしろこの時期の中流階級にとっては，大スカートもコルセットも，むしろ＜性を隠蔽＞するためのものであって，性的魅力を誇示するための極端な tight-lacing は，gentility の基準に反するものだったはずだからである。

ところで，ほぼ1820年頃のコルセットの流行は，また1830年頃のスカートの＜拡大＞とともに始まったと思われる，中流階級における gentility の拡大は，一方では，中流階級女性のさまざまな領域の縮小あるいは緊縮を意味するものであった。そしてそのことを端的に表していたのはコルセットであった。そしてコルセットの流行とほぼ同じ頃に，言葉の領域における縮小が始まっている。

> As early as 1818 an observer was commenting that the language of society was growing " more refined. No one can say ' breeding ' or ' with child ' or ' lying-in ' without being thought indelicate. ' Cholic ' and ' bowels ' are exploded words. ' Stomach ' signifies every thing."
> And presently when " legs," " breasts " and " stomach " disappeared from novels and speech, as had happened by 1840, and were replaced by " limbs," " bosom " and " the liver," we may deduce a high tide of prudery. (Cunnington, p. 197.)

「繁殖，妊娠，産褥」は，言葉の領域における gentility の表れである prudery によって，禁句になってしまうのである。ちなみに出産は，例えばディケンズの場合について言えば，『ドンビー父子商会』の冒頭を飾る出来事になっている。だがそこでも，出産は誕生に置き換えられてしまっている。ディケンズ自身，15年の結婚生活の間に10人の子供をもうけているのに，彼は出産そのものを父親の視点から描くことさえしていないのである。gentility の拡大は，先ず言葉の領域における縮小を生みだしたのであるが，それは同時に，言葉によって語ることのできる領域の縮小をもたらすものであったことが，この例からも分かるであろう。そして prudery によって出産以

上に<敬遠>され，語られる領域から語られざる領域に追放されたものは，女性の生理(menstruation)であった。生理は，ヴィクトリア時代の prudery が，特に生理的，身体的な言葉の縮小の方向ではたらいたために，医学文献でしか語られない（Perkin, J., p. 21.），沈黙が支配する<経験>になってしまったのである。ちなみに，出産が小説などで女性の視点から語られるようになるのは 1930 年代から，生理が小説で描かれるのは Doris Lessing の *The Golden Note-book* (1962) から（Cosslett, p. 1.）である。

上の文章に述べられているように，1820年頃に始まった prudery は，大きなところから小さなところにまで拡大し，エスカレートしていく。そして1840年にはほぼ<完成>するのである。この頃になると，ディナー・パーティなどでは，チキンの脚も limbs と言われるようになり，さらに家具の脚にまで小さなズボンがはかされる（Roebuck, p. 33.）ようになっていく。就寝するという表現も，誤解が生じないように go to bed から retire to rest に変わる（Bédarida, p. 160.）のである。大スカートが流行したのも，この言葉の領域における prudery と無縁ではないであろう。

次に gentility の拡大がもたらした縮小は，女性の職域の縮小であった。そしてこの動きは18世紀末に始まり，1840年代から50年代に完成している。中流階級女性の仕事からの分離，さらに不労と遊堕への<囲い込み>（enclosure）は，gentility の拡大とともに，加速的に進行したのである。先ず18世紀末からの変化である。

> Many openings for them (women) contracted, as men moved into traditional female vocations such as midwifery and hairdressing, and witches were hounded. (Porter, p. 32.)

18世紀末から 100 年以上もの間，イギリスの歴史のなかで，少なくとも公には，助産婦は存在しなくなる。この時から，出産は，医学的には女性が介入することのできない，男性のみが<扱う>ことのできるものになったのである。助産婦の存在がふたたび公に認められるようになるのは，1902年である（Cosslett, p. 53.）。

> ......the range of activities considered socially acceptable for middle-

class women decreased; whereas in the 1790s, middle-class women had worked as jailors, plumbers, butchers, farmers, seeds-men, tailors, and saddlers, by the 1840s and 1850s, dressmaking, millinery, and teaching far outstripped all other occupational activities. Of these occupations, private teaching was widely considered the most genteel. (Poovey, pp. 126-127.)

1851年の統計では，20歳以上の女性100人中13人は未亡人であった（Helsinger, p. 140.）し，離婚率はゼロに等しかったのにもかかわらず，1850年代の結婚の五分の一は10年続かなかった（Perkin, J., p. 132.）という。そういう時代でありながら，肉屋や農家の未亡人は，gentility の拡大のために，家業を続けることが出来なくなったのである。そして女性の職域は縮小を続け，1850 年代にはレディーの職業は，ついに女性服の仕立て，婦人帽の製造販売，家庭教師，それに ladies' companions（Thompson, p. 198.）しかなくなってしまう。1851年の時点で，20歳以上の女性 100 人のうち 30 人は未婚で，しかも中産階級の未婚女性の三分の一は，働かなければ困る状態にあった(Helsinger, p. 140.)。その中で，女性の職域の縮小は進んだのである。

そればかりではない。女性服の仕立てなどの＜許される＞職業のなかでもさらに genteel, ungenteel つまり中流の中，下層の色分けがされるようになる。ディケンズの『ボズのスケッチ集』は，おそらく genteel という言葉が彼の作品のなかでも一番多く使われ，また収入への言及がもっとも多い作品であり，その意味で，gentility を基準とする階級意識がもっとも強く表れている作品であるが，これに登場する Miss Martin（'Characters', Ch. 8.）は，婦人服の仕立てと帽子製造を職業としている。針仕事を生業とすることは gentility の基準にかなうことだった(Beer, p. 158.)のだから，彼女は中流階級の一員である。だが彼女の客は召使であり，同じ中流階級でも彼女は下層中流階級の一員である。つまり彼女は shabby-genteel people（Ibid., Ch. 10.）の一人である。一方，彼女と違って，ミセス・ジェネラルは，家庭教師ではあるが，genteel なレディーである。彼女は，娘二人の授業料として，年400ポンドも請求している（*Little Dorrit*, Book II, Ch. 2.）のだから。同じ家庭教師でも，100ポンド以上稼ぐ家庭教師と，10ポンドとか20ポンドしか稼げない，召使，つまり労働者階級に無限に近い家庭教師とで

は，格が違うのである。genteel, ungenteel に見られる区別は，大きな社会階級の区分が中流階級の中に持ち込まれ，中流階級の中での，しかも相当に強烈な「縦の対立関係」を生みだしたことを物語っている。

> A lady, to be such, must be a mere lady and nothing else. She must not work for profit, or engage in any profit that money can command......The conventional barrier that pronounces it ungenteel to be behind a counter, or serving the public in any mercantile capacity, is greatly extended. The same in household economy......ladies...... have hardly yet found themselves a sphere equally useful in the pursuits of trade and art to which to apply their abundant leisure. (Hall, p. 63.)

上の文章は Margaretta Grey の1853年の日記の一節である。前段では，中流階級女性のレディー化にともなう，商人の妻の，仕事からの分離について述べられている。だが商人の妻の場合にも genteel, ungenteel の違いがある。ホールによれば (Hall, pp. 109-110.), genteel な商人は，high-street traders すなわち，カウンターの中に立ってはいるが，quiet, gentlemanly dignity of bearing を持った，裏通りの small shopkeepers や traders よりも一格上の商人である。19世紀半ばでは，裏通りで労働者階級相手に商売をしている商人は，本当の，つまり genteel な中流階級とは考えられていなかったからである。では，繁華な通りに店を構えている商人の妻は，どのようにレディー化したか。彼女は初めは店の二階に住み，店のいろいろな仕事をし，客の相手もする。しかし段々店には出なくなる。やがて郊外に家ができて，一家はそちらへ引っ越す。店は lock-up shop となり，夫は郊外の家から＜通勤＞し，彼女は召使いがいて「ありあまる暇」をもてあます専業主婦となる。ホールによれば，商人の妻のレディー化のプロセスは，こうして完成する。そして時代がもっと下ると，裏通りの商人の妻たちも，同じようなプロセスをたどって genteel な中流階級に入っていくことになる。

だが gentility の拡大によって，またそれに伴う女性の領域の縮小によって，中流階級の妻たちは，また一般に女性たちは，何処に，またどのようなものとして＜囲い込まれ＞たのか。先ず場所であるが，それは単なる家では

なく，高い塀に囲まれ，厚いカーテンに包まれた，アリエスの言うところの＜近代的な家族＞の住む＜家庭＞であった。そして19世紀に完成したと言われる近代的な家庭は，ディケンズをはじめとする文学者，知識人によって広く支持され，奨励された。次に引くのは，ディケンズの『ボズのスケッチ集』に収められている ‘Sketches of the Young Couples’ の Conclusion の一節である。ディケンズはここで若者に家庭の重要性を説いている。

> Before marriage and afterwards, let them learn to centre all their hopes of real and lasting happiness in their own fireside......let them believe that round the household gods, contentment and tranquility cluster in their gentlest and most graceful forms......and that many weary hunters of happiness through the noisy world, have learnt this truth too late, and found a cheerful spirit and a quiet mind only at last.

ここで特徴的なのは「家庭の幸せ」と，それがもたらす「静かな心」が「喧騒の世界」と対置されていることである。ディケンズがここで考えている家庭は，一家の中でただ一人の breadwinner として働くことが＜許されている＞中流階級の男性が，暖炉の傍の，専用の安楽椅子に坐って疲れをいやす場所としての家庭である。つまり経済的個人主義と自由競争の世界の戦士である男性から見た家庭である。だが，家庭における「静かな心」と「喧騒の世界」との対置の裏にあるのは「喧騒の世界」と＜静かならざる心＞の等置である。では「喧騒の世界」の＜静かならざる心＞とはどのようなものか。次のラスキンの文章は，その点について語ってくれる。

> The man, in his rough work in open world, must encounter all peril and trial : ——to him, therefore, the failure, the offence, the inevitable error ; often he must be wounded, or subdued, often misled, and *alwalys* hardened. But he guards the woman from all this ; within his house, as ruled by her, unless she herself has sought it, need enter no danger, no temptation, no cause of error or offence. This is the true nature of home——it is the place of peace ; the shelter,

not only from all terror, doubt, and division. (Ruskin, *Sesame and Lilies*, p. 122.)

男性は「広い世界」に出て，厳しい労働に耐え，「あらゆる危険や試練」に会い，試行錯誤を重ねつつ苦闘し，家庭を「平安の場」にする。ディケンズの表現とつなげて言うなら，男性は「静かな心」を犠牲にして外の世界で働き，家庭を「平安の場」にするわけである。だが外の世界で働く男性について用いられている「避けがたい過誤」「しばしば惑わされ，常に感情は鈍麻させられる」などの表現を，女性について用いられている「自らが求めない限り，危険も誘惑も，過誤あるいは罪の原因となるものも」ないという表現と突き合わせて考えてみると，ディケンズの「喧騒の世界」あるいはラスキンの「広い世界」の裏に隠れている意味が明らかになってくる。家庭という内の世界に対する外の世界で働く男性は，物理的，精神的，道徳的に，外の世界の穢れに染まらざるをえない。それに対して「平安の場」である家庭にいる女性は「自ら求めない限り」精神的，道徳的に清浄でいられる。ラスキンは，そして恐らくディケンズも，こう考えているのである。ここには，労働イコール ungenteel，不労イコール genteel という考え方に加えて，労働イコール精神的，道徳的堕落につながるもの，不労イコール精神的純粋さ，道徳的純潔を保つものという考え方がある。この点からすると，中流階級女性の労働からの分離には，階級の標識以上の意味があったと考えられる。つまり，女性の労働からの分離は，同時に穢れの世界からの隔離でもあったということになる。ディケンズにとっては，労働は，愛する者に捧げる犠牲だったと言われる（Welsh, p. 144.）が，彼のこの労働観も，労働は ungenteel であるばかりでなく，道徳的純潔を損なうものであるという考え方が存在したことを裏書きするものと言えよう。この考え方はまた，ディケンズの，職業についている女性の扱い方が冷たいのにも当然関係しているであろう。

ヴィクトリア時代の中流階級女性は，このようにして，二重の動機から，労働の世界から隔離され，家庭に囲いこまれた。しかし少なくともある時期からは，動機としてはむしろ，女性，さらに家族を，精神的，道徳的な無菌状態に置くことのほうが強くなってきたと考えられる。ベストによれば，ロンドンをはじめ各都市には，特殊な，というよりも特権的な通りがあって，そこには主として富裕な中流階級が住んでいた。その通りには門があり，門

番がいて，浮浪者や呼び売り商人は勿論，乗合馬車から荷車まで立ち入りできなかった。そしてロンドンの場合，このような通りが，1875年には中央部と西部に 150 もあった。このような single-class exclusiveness 志向（Best, pp. 35-36.）の背後には，文字通りの喧騒だけでなく，「喧騒の世界」の閉め出し，つまり，住環境の徹底した道徳的無菌化という狙いがあったと考えるべきであろう。そして，これほど極端ではなくとも，中流階級女性は多かれ少なかれ＜無菌家庭＞に囲いこまれた。そしてそこから外の世界に出るときには，少なくとも1880年代までは，若い女性は一人歩きはできなかった。乗合馬車に乗ることも三等車に乗ることもできなかった。1876年にニューナムのフェローが女性同士でホテルに泊まるのにも，a small boy brother のエスコートが要求された(Abbot, 120-121.)のである。女性に集中した gentility の拡大は女性の世界をここまで縮小したのである。そしてこのような労働イコール精神的，道徳的堕落につながるもの，不労イコール精神的純粋さ，道徳的純潔を保つものという考え方は，また一方で，精神的，道徳的な二分法を生みだした。精神性の希薄化，道徳的な堕落の危険をかえりみず，愛する者のために働く男性は，いわば人類の道徳性を一身に担うものとして，女性の otherness（Morris, p. 14.）に夢と理想を託したのである。男性は穢れた世界と接触し，穢れた身である。しかし女性は穢れた世界を知らぬ純粋無垢な存在である。これが，男女の精神性，道徳性に関する double standard であった。そしてその結果，女性は人間の姿をとどめない程に理想化された。女性は，精神性と道徳性の権化となったのである。勿論，女性を理想化する傾向は知識層で強かった。そしてその結果，カーライルやラスキスのように，結婚を＜完了＞できない者もでてきた。

> In a letter to his lawyer, Ruskin explained that he did not consummate his marraige on his wedding night because he was repelled by the sight of his wife's body. There was something wrong with it, he felt; it was not as he had imagined it, it was "not formed to excite passion". One theory has it that he was especially repelled by her pubic hair and possibly by her breasts, his image of the female body having come from the highly idealized, de-sexualized nudes he was familiar with in paintings and statues. (Himmelfarb,

p. 7.）

ここでは，結婚完了不能の原因として「高度に理想化され，非性化された絵画や彫刻のヌード」の影響が挙げられているが，ヴィクトリア時代がまた，女性を理想化するタイプのロマンティックな文学の時代でもあったことは忘れられてはならない。勿論，ディケンズもそういう文学者の一人であった。ネガティヴな場合は別として，彼の描く女性は an enbodiment of the grace and mercy of God（Slater, p. 308）であり，「高度に理想化され，非性化された」ものだからである。ヴィクトリア時代の美術も文学も，競ってこのように女性を理想化した背後には，先ず無菌状態に置かれた人間の道徳的，精神的な善良さ，無垢さに対する信念があったであろう。だが同時に，美術や文学も，女性が接触する世界の一部なのだから，当然無菌化されるべきだという考えが働いたことも確かであろう。なにしろ文学も美術も，先ず女性のものだった時代なのだから。それにまた，理想化された女性像は，性的な成熟年齢と結婚の時期が，晩婚化の進行のために開いてきていたこの時代にあって，Dr Acton が推奨し，Thomas Arnold が採用した low diet, aperient medicine, gymnastic exercise and self-control（Stone, p. 243.）と同じく，性的欲求を抑えるために必要な＜制度＞でもあった。理想化された女性像は，昇華作用によって，性的欲望を精神的なルートで解消させるからである。その意味では，ディケンズもこの制度の維持に貢献した作家であった。そしてこの制度は，結婚前の女性を男性の性欲から護るという点では，かなりの有効性を持つものであった。ただ，この制度の難点は，時として＜天上化＞した女性を＜地上化＞できないケース，あるいは精神的な愛を肉体化できないケースが出てくることであった。少なくともラスキンの場合はそれに当たると言えるであろう。

理想化された女性像は gentility の標識である不労から出発し，道徳的純潔，精神的純粋の担い手という女性観を経て，女性の理想化を生みだした。そして理想化された女性像は，ラスキンの場合に見られるような性の歪みを男性にもたらした。だが，理想化された女性像がもたらした被害は，むしろ女性自身の方に大きかった。それは，女性における愛の非地上化のもととなり，女性の性の領域の縮小の原因となったのである。その構造は，当時の女性問題，家庭問題の評論家であった Mrs Ellis の次の文章にはっきりと現れ

ている。

He (Man) has his worldly interests, his public character, his ambition, his competition with other men——but woman centres all in that feeling (love), and 'in that *she* lives, or else *she* has no life'. In woman's love is mingled the trusting dependence of a child, for she ever looks up to man as her protector, and her guide; the frankness, the social feeling, and the tenderness of a sister——for is not man her friend? The solicitude, the anxiety, the careful watching of the mother——for would she not suffer to preserve him from harm? Such is love in a noble mind...... (Mrs Ellis, *The Daughters of England,* Hall, p. 62.)

ここでは先ず自由競争の世界，喧騒の世界で働く男性と，家庭に囲いこまれた女性の領域がはっきりと分離される。次に女性の＜専門領域＞は必然的に「愛」となる。しかしその愛は，夫に対する場合でも，子供の父親に対するような，姉妹が兄弟に対するような愛，友人としての，さらに母親としての愛であって，異性に対する愛ではない。異性に対する愛は，意図的に＜省略＞されているのである。そして最後には「高貴な心の持ち主」にとっては愛は「そういうものである」という断言によって，その種の愛は女性にとっての当為となる。ここには愛の非性化の弁証法がある。あるいは愛からの性愛の追放がある。そして次の文章に述べられているように，大多数の中流階級女性にとって，性愛の復権は第一次大戦まではなされないのである。

Woman was transformed into a sexless figure......There was also widespread ignorance of the facts of life. Current prejudices distorted even the utterances of scientists: from Dr Acton who, although he was a reputable scientist, remarked, 'Happily for them the majority of women are not much troubled by sexual desire: the best mothers, spouses and housewives know little or nothing of the pleasures of the senses; their strongest feelings are devoted to home life, children and their domestic duties', down to the learned doctor who, just before

1914, told his students at Oxford: 'Speaking as a doctor, I can tell you that nine out of ten women are indifferent to sex or actively dislike it; the tenth, who enjoys it, will always be a harlot.' (Béda-rida, p. 162.)

ヴィクトリア時代を代表する医学者から20世紀の医学者まで，「大多数の女性」あるいは「十人中九人の女性」が「性欲に煩わされる事はない」あるいは「性には無関心であるか性を毛嫌いする」と言っているのである。gentilityの拡大は女性の性をここまで縮小したのである。ただし「時代の偏見が科学者の言葉まで歪めた」というベダリダの説には，私は反対である。私は二人の「言葉」が「時代の偏見」に歪められていたのではなくて，むしろ二人の思考が「時代の偏見」に歪められていたと思うからである。さらに言うなら，二人とも，それぞれの夫人の例をとおして，家庭の道徳的無菌化，女性の世界の縮小の効果を信じていたと思うからである。女性に性欲は無いというのは gentility の拡大の一部をなす，その意味で gentility のイデオロギーの一翼を担う考え方であるが，上の二人の医学者は，そしておそらくディケンズも含めて多数の知識人は，そのイデオロギーを作ることに加担しただけでなく，それを信じていたのである。ディケンズが15年間の結婚生活を解消して，いわば外の世界の女性のもとに走った原因も，家庭婦人には性欲はないという考え方だったのかもしれない。こういう考え方が夫婦生活の障害にならなかったはずはないからである。前にも触れたが，ディケンズは，初めからしっくりいっていなかったと言われる結婚生活の間に，10人の子をもうけた。しかもその間に数回の流産もあった（Snow, p. 74.）という。夫人は，結婚生活の間中，the treadmill of the yearly pregnancy (Gilmour, p. 190.) を踏まされ続けたわけである。では女性は一般にこのイデオロギーをどう受け止めたのであろうか。

Yet an ideology about women emerged in the 1840s and 50s which virtually denied women's sexuality, and the majority of women accepted the judgement......A mid-Victorian mother told her daughter, 'After your wedding, my dear, unpleasant things are bound to happen, but take no notice. I never did.' And Lady Hillingham famously

wrote in 1912:

> I am happy now that Charles calls on my bedchamber less frequently than of old. As it is, I now endure but two calls a week and when I hear his step outside my door I lie down on my bed, close my eyes, open my legs and think of England.（Perkin, J., p.64.）

「女性の性欲を事実上否定するイデオロギー」が現れたのは，上の記述によれば，1840年代と50年代である。コルセットやprudery や大スカート等の登場との時差の関係で見ると，女性無性欲説は gentility のイデオロギーを完結するものであったようである。労働による外界との接触を免除され，道徳的無菌状態に置かれた the angel in the house である女性に性欲は無い。この「判断を」「大多数の女性も受け入れ」，性欲が無い<かのように>生きたのである。おそらくディケンズ夫人も，また，前にその言葉を挙げた二人の医学者の夫人も，そのように生きたのであろう。一方で男性の性欲は，性による快感も含めて認められていたのであるから，その偏頗な状態が夫婦生活に与えた影響には，パーキンの引用に見られるように，我々の想像を絶するものがあったであろう。ディケンズ夫人がもし日記をつけていたら，彼女も「チャールズの足音がドアの外でしたら，目を閉じて」云々と書いていたかも知れないのである。

「女性の性欲を事実上否定するイデオロギー」が男女を問わず信じられていたことは，1860年代に，女子も masturbation をすることが<発見>され，それが certain forms of insanity, epilepsy and hysteria in females の原因となるものと信じられて， clitoridectomies をおこなう医者がロンドンなどに出てきた（Perkin, J., pp. 21-22.）ことからも分かる。この時代のヴィクトリア朝人は，女性の性欲の発見に，男女とも驚愕し狼狽したのである。なにしろ性が a ‘lower’ function であること，a condition of psychological ‘purity’ on sex is common in children and women であることが信じられていた時代（Mason, p. 41.）なのであるから。ストーンによれば，性の抑圧はヴィクトリア朝中期に頂点に達する（Stone, p. 339.）のであるが，上記の事実はその抑圧がいかに完璧におこなわれたかの証左となるであろう。道徳的な無菌状態に置かれた女性の道徳性に対する信仰は，つい

に女性の性欲の欠如まで信じさせたのである。

ところで奇妙なことに，女性をそこまで＜神格化＞させたものは，女性の＜素朴さ＞への信頼であったと思われる。

> T. H. Huxley, the biologist, referred to the difference in mental and physical endowment, the average woman being inferior to the average man. Charles Darwin believed that women's superior strengths in powers of intuition, rapid perception and imitation were, in fact, characteristics 'of the lower races and therefore of a past and lower state of civilization.' (Mingay, p. 220.)

時代を代表する学者が，女性は男性よりも劣っている，「女性は文明の過去の低級な状態にある」と信じていたのである。女性を家庭に囲い込んで，道徳的無菌状態に置けば，「性に関する心理的な無垢の状態」は確保できると男性に信じさせたものは，他ならぬこの女性の＜素朴さに関する信仰＞だったのである。

そしてこの女性の素朴さへの信仰は，また悪名高いヴィクトリア朝の男女の，殊に夫婦間の法律上の不平等をも生みだした。既婚女性は財産所有権，子供の保護権を認められなかったのである。そして，こうした既婚女性の法律上の無権利状態をもっとも劇的な形で表しているのは，次のエピソードであろう。

> One day at Waterloo Station she (Millicent Fawcett) took her ticket, and as she slipped her purse back into her pocket she felt there another hand "not her own." She tried to hold it, but the thief eluded her grasp, and fled——only to fall ultimately into the arms of a policeman. She went with him to the police station and made a charge. When she came up six weeks later to give evidence against the pickpocket, she found that he was charged "with stealing from the person of Millicent Fawcett a purse containing £1 18s. 6d., the property of Henry Fawcett."......"I felt," she ends, "as if I had been charged with theft myself." (Clephane, p. 162.)

上のエピソードの女性は貴族であった。社会が生産の倫理から消費の倫理へと移行してゆくなかで，household purchasers としての妻は，これまでになかったような重要な地位を持つようになっていた（Loeb, p. 33.）のであるが，身分の上下にかかわらず，法律上，妻は夫の金品を＜所持＞することしかできなかったのである。ちなみに，ミリセント・フォーセットは，既婚女性の財産所有権の拡大に努めた女性の一人である。彼女達の運動によって，1870年には，既婚女性は，労働，投資，遺産相続による200ポンド以下の収入については＜所有＞が認められるようになり，さらに1882年には，結婚前，結婚後を問わず，取得したすべての財産に対する権利を認められるようになる。だが，妻が行商で稼いだ金を飲み代としてだせと言って断られたために，かっとなって妻を殴り殺してしまった男が，彼がうけた「挑発」（provocation）ゆえに，＜情状酌量＞され，放免された1877年の判例（Perkin, J., p. 121.）を見ても，ヴィクトリア時代の既婚女性の財産所有権に対する軽視が，いかに根強いものであったかが，分かるであろう。

財産所有権に関する男女別基準がこのように強力なものだったのだから，選挙権についても当然二重基準が適用された。そして選挙権の場合は，男女別基準の撤廃実現には，財産所有権の場合よりもっと時間がかかった。何しろヴィクトリア女王自身が，次のように考え，発言していたのである。

> ......the claim for women's rights 'on which her poor feeble sex is bent'......was a 'mad, wicked folly......forgetting every sense of womanly feeling and propriety'. (Mingay, p. 220.)

ここで女王が「女性の権利主張」と言っているものは，直接には選挙権である。女王はそれを「狂気の沙汰」と言っているのである。こういう状態であったから，イギリスの女性が完全に男女平等な国政レヴェルの参政権を得たのは，地方自治体などの選挙権，被選挙権は別として，1928年であった。ヴィクトリア時代の女性に与えられた idealized inferiors（Ingham, p. 13.）の地位から女性が抜け出すのには，実に長い時間と努力を要したのである。そして女性をそういう地位に追い込んだのは，gentility の拡大と，それにともなう，さまざまな女性の領域における縮小であった。ディケンズがそうい

う女性のあり方をどう捉え，どう描いたか。それについては稿を改めて見てみたい。

≪注≫

（1） クリノリンの語源は hair プラス linen だから，petticoats lined with stiff horsehair が本来のクリノリンであるが，ここでは，1856年に現れた separate metal-cage を指している。

Works cited

Abbott, Mary, ***Family Ties : English Families, 1540–1920,*** Routledge, 1993.

Bédarida, François, ***A Social History of England, 1851–1990,*** Routledge, 1990.

Best, Geoffrey, ***Mid-Victorian Britain, 1851–75,*** Fontana Press, 1990.

Briggs, Asa, ***Victorian Things,*** Penguin Books, 1990.

Checkland, S. G., ***The Rise of Industrial Society in England, 1815–1880,*** Longman, 1989.

Clephane, Irene, ***Towards Sex Freedom,*** 1938, Bodley Head.

Cosslett, Tess, ***Women Writing Childbirth,*** Manchester Univ. Press, 1994.

Crowley, Helen, (ed.), ***Knowing Women,*** Polity Press, 1992.

Cunnington, Willett, ***The Art of English Costume,*** Collins, 1949.

de Marley, Diana, ***Working Dress : A History of Occupational Clothing,*** Batsford, 1986.

Gernsheim, Alison, ***Victorian and Edwardian Fashion : A Photographic Survey,*** Dover Publications, 1981.

Gilmour, Robin, ***The Victorian Period,*** Longman, 1993.

Hall, Catherine, ***White, Male and Middle Class,*** 1992, Polity Press.

Helsinger, Elizabeth, K., ***The Woman Question,*** Univ. of Chicago Press, 1989.

Himmelfarb, Gertrude, ***Marriage and Morals among the Victorians and Other Essays,*** I. B. Tauris, 1989.

Ingham, Patricia, ***Thomas Hardy,*** Harvester, 1989.

Loeb, Lori Anne, ***Consuming Angels : Advertising and Victorian Women,*** Oxford Univ. Press, 1994.

Mason, Michael, ***The Making of Victorian Sexuality.*** Oxford Univ. Press, 1994.

Morris, Pam, ***Literature and Feminism,*** Blackwell, 1993.

Nunn, Joan, ***Fashion in Costume, 1200–1980,*** Herbert Press, 1990.

Perkin, Harold, ***Origins of Modern English Society,*** Routledge, 1986.

Perkin, Joan, ***Victorian Women,*** John Murray, 1993.

Poovey, Mary, ***Uneven Developments,*** Univ. of Chicago Press, 1988.

Porter, Robin, ***English Society in the Eighteenth Century,*** Penguin Books,

1990.
Quennell, Marjorie & C. H. B., *A History of Everyday Things in England*, B. T. Batsford, 1952.
Read, Donald, *England 1868–1914*, Longman, 1987.
Richards, Jeffrey, and John M. MacKenzie, *The Railway Station : A Social History*, Oxford Univ. Press, 1988.
Roebuck, Janet, *The Making of Modern English Society from 1850*, Routledge, 1982.
Ruskin, John, *The Works of John Ruskin*, London, 1903–12, XVIII.
Slater, Michael, *Dickens and Women*, J. M. Dent & Sons, 1986.
Stone, Lawrence, *The Family, Sex and Marriage in England, 1500–1800*, Harper Torchbooks, 1979.
Thompson, F. M. L., *The Rise of Respectable Society*, Fontana Press, 1988.
Waller, P. J., *Town, City & Nation, England 1850–1914*, Oxford Univ. Press, 1983.
Welsh, Alexander, *The City of Dickens*, Harvard Univ. Press, 1986.
Williams, Merryn, *Women in the English Novel, 1800–1900*, MacMillan, 1984.
Wood, Christopher, *Victorian Panorama : Paintings of Victorian Life*, Faber and Faber, 1990.